紙芝居で環境教育

富士・市民グループ 富士山題材に

来月3作目初披露

環境教育に使う紙芝居「富士山とごみとわたし」を掲げるメンバー＝富士市本市場

富士市の市民グループが「富士山とごみとわたし」と題した紙芝居を作り、小中学生を対象に環境教育を続けている。目下、富士山と八ケ岳が「高さ比べをした」という昔話から始まる「パート3」を制作中。12月5日に開催される同市環境フェアで、初披露する予定だ。

このグループはNPO法人「富士市のごみを考える会」（小野由美子代表）。メンバーは02年から、同市や沼津市内などの小中学校で、ごみの減量や資源の再利用、リサイクルの大切さを教える環境授業の講師をしている。

この授業の冒頭で、同会理事の梅原万奈さんが美術大学卒業の腕前を生かして制作した紙芝居を、約15分間見せる。

「パート1」は縦60㌢、横80㌢の絵が20枚。ストーリーはまず、富士山が「私の体のあちこちに、穴を掘ってゴミを埋めるし、煙突や自動車の煙がたちこめて」と嘆く。そこから地球温暖化の問題や、生ごみを発酵させて堆肥にする「ぼかし」という処理方法などを分かりやすく教える。

「パート2」では、「いつの頃からか、人間は『自分たちは特別だ』と思うようになり、地球の資源を独り占めにし、地球を汚してきてしまいました」と訴える。

制作中の「パート3」は、富士山より高い「ごみの山」が「富士山よ、お前自身もふもとの方はごみだらけじゃないか。お前こそ、ごみの山だ」と笑う場面がある。梅原さんは「子どもたちが楽しみながら環境授業を受けられるように紙芝居を作った。パート3では、八ケ岳が富士山と高さ比べをしたという昔話を採り入れた」と話す。

環境授業を受けた子どもたちからは、同会に「生ごみが肥料に変わるなんて知りませんでした」（富士市立伝法小4年生）などの礼状が届いている。

出典：平成21年11月30日－朝日新聞-静岡伊豆岳南版